

第 2 集

北の縄文・南の縄文

甲元眞之
熊本大学

吉崎昌一
元札幌国際大学

司 会
佐藤洋一郎
静岡大学



出席者プロフィール

甲元眞之（こうもと・まさゆき）
熊本大学文学部教授。研究テーマは東アジアにおける初期農耕社会の形成過程に関する研究。主として農耕社会の基本的な生業の枠組みを把握し、農耕生活を基盤とした社会に関する各種墓制や集落形態、石器組成、青銅器物などの遺構・遺物の分析をとおり、特殊個別的な東アジア世界の究明にあたることを心がけている。主要著書論文『中国新石器時代の生業と文化』（中国書店）2001年、『環東中国海沿岸地域の先史文化』第1編～4編（熊本大学文学部）1998～2001年など。

吉崎昌一（よしざき・まさかず）
元札幌国際大学教授。研究テーマは旧石器文化や北海道の古代文化についての研究。この20年来は遺跡から検出される炭化植物種子を通じて、日本列島の栽培植物出現を追求している。縄文文化に栽培植物が存在していると主張。著書著書論文『消えた平原ベーリンジア』（NHKブックス）1979年、『日本における栽培植物の出現』『季刊考古学』第50号（雄山閣出版）1995年、『縄文時代の栽培植物』『第四紀研究』36（5）第四紀学会、『東はヒエ、西はイネー縄文時代の栽培植物』『歴史街道』（PHP研究所）October 1997など。

佐藤 今日、「北の縄文・南の縄文」というテーマで、吉崎昌一、甲元眞之両先生に語っていただきます。日本列島は単独にあるわけじゃなくて、当然大陸と深い関係を持っているわけです。だけど中国大陸の植物や文化は南北で全然違う。そうすれば、日本列島の縄文にも北と

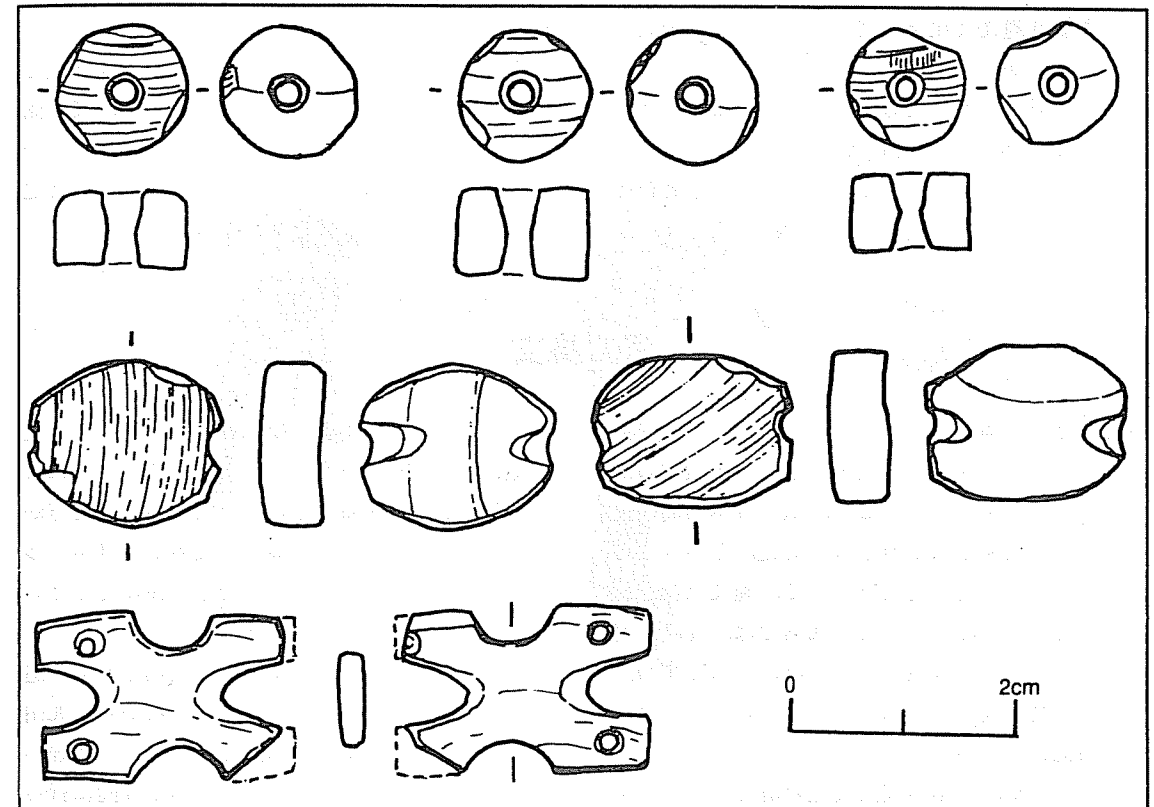
南があるはず。そういう視点からのお話を企画しました。自由に語って頂きたいと思います。そうですね、じゃあどっちからいきましょう。北からいきましょうか、南からいきましょうか。

北の縄文

甲元 北が典型的な縄文の世界ですから、北からいきましょう。

吉崎 縄文文化という用語については、どうもその概念規定に問題があるような気がしています。というのは、現在は日本列島に拡がる新石器時代の文化を全てひっくるめて縄文文化にしているわけでしょう。これでうまくいくのかな…。北海道の内部をみても、東部やオホーツク海の沿岸と西部や渡島半島などの新石器時代で

・石刃鏃：石刃鏃文化石器群の中でもっとも特徴的な鏃。この文化の石器は、他の縄文文化の石器と異なり、石器の素材に精緻な石刃が用いられている。石刃鏃文化は、北海道東部を含めた北東アジアのかなり広い地域から確認されている。シベリア、極東地区では後期旧石器時代から新石器時代への移行期にみられ、新石器時代前半に栄える。石刃鏃は美麗な石刃の背面に押圧剥離による細かな加工で整形される特徴をつ。北海道では、縄文時代早期7000年前頃に位置づけられ、大陸的な文化と考えられる。



貝製品（「礼文町船泊遺跡発掘調査報告書」（平成10年度）より）

文化が北方からやってくる。侵入の規模の大小の差はあれ、いろいろな連中が時々現れる。この連中は形質的にも北海道の土着人と異なり、北方の要素が強い。こうした異なったヒト集団の侵入現象は、北海道東部が中間的な性格を持つ地域だからかもしれません。この背景を考えないと、北海道の縄文文化とか東日本の縄文文化の枠組みが崩れる恐れがあります。つまり何をもって縄文文化という枠組みとするのかについては、再検討の余地があるように思うのです。

しかし、一方では最北端の礼文島で縄文文化後期の遺跡が地元の教育委員会と国立歴史民俗博物館で発掘され多量の人骨がおびただしい貝製装飾品とともに出土しました。ここの縄文文化後期の土器は、北海道のものというより、むしろ東北地方北部のものに近い。人骨は典型的な縄文人の特徴を持つものでした。ここの貝製

装飾品は、極東シベリアの奥地にまで輸出されていた可能性が考えられています。石器の原材料になった北海道産の黒曜石も輸出されていたと言われています。問題はサハリンの古代文化がまだはっきりしないこと。縄文土器は発見されているのですがね。



吉崎昌一

あまり縄文文化を孤立したものとして考えないこと、かなりブロードに北方に関係がありそうだと考えておいた方がよいということです。今まではあまり固定的に考えすぎていたのでは、と思います。そうしないと今日の話題は広がらないのではないのでしょうか。

佐藤 サハリンですか…。

吉崎 そうです。だからね、北海道の縄文文化というのは北につながる部分があってね、文化圏をずっと重ねていくと北につながっていくのじゃないかと思うのです。だから、ちょっと北の縄文文化の考え方を変えなければならない。

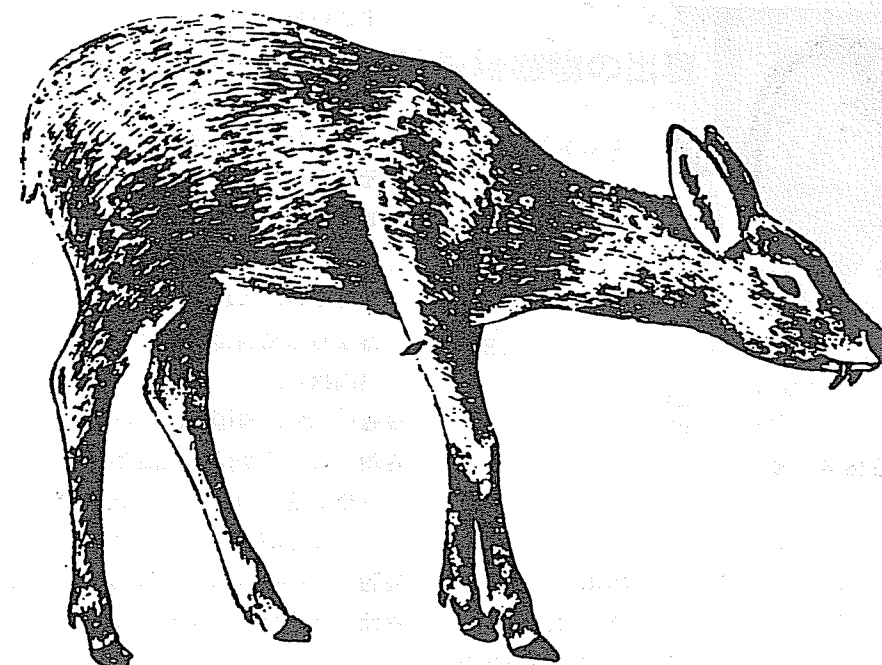
南の縄文

甲元 それは南の方もそうなんですね。吉崎先生が言われるように、縄文土器をどう定義するかによるんです。今のところ、広く日本列島の先史時代に展開した土器を持つ文化だということですけど、最初の定義をもって、縄文土器を縄目を持つ土器だとすると、九州では、縄文土器にあてはまるのは後期中頃だけなんですね。それも磨消縄文の手法で土器を造る。あとは、全然縄目はない。

ところが、九州の縄文文化の研究者たちにも捉え方が大きく二つありまして、東日本的な縄

文とまったく同じような内容を持つものと定義するものと、そうじゃなくて実質としてはむしろ大陸との関係の深いものだという捉え方がある。大勢としては、縄文研究者が東日本に多いものですから、すべてそれを一律に見るという考え方が多い。

ところがですね、九州の土器の編年研究が進んでくると、ずれがきている。それから、九州の土器の中にはむしろ韓国とのつながりが強いものがある。たとえば日本の土器が韓国に行ったり、韓国の土器が日本に来てたりと、そう



キバノロ

うのがずっとみられるわけです。ただこの場合、製品が行ったのか、向こうでまねて造ったのか微妙なところはありますけど。早期の終り頃からはっきりするのは、伊万里産の黒曜石が韓国の南部に行ってます。それから、それに対して、特殊な、韓国みたいな寒いところでしか、寒流でしか捕れないような貝製品が、逆に、対馬とかで見つかっている。

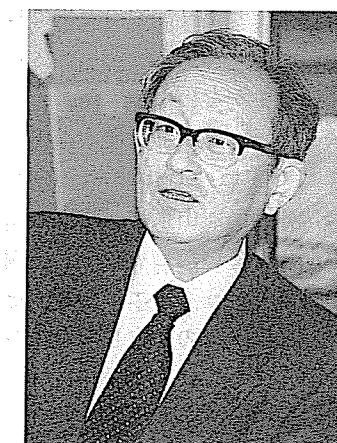
佐藤 具体的にどういうものがあるんですか。

甲元 ユキノカサやサルアワビなどの寒流域に生息する貝種で掬えられた腕輪やキバノロの牙で作った装飾品が九州の縄文の遺跡で出たりします。

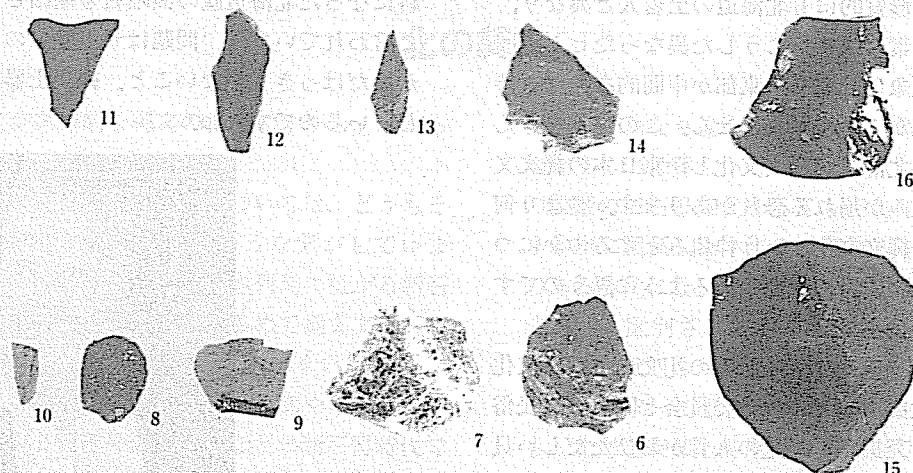
ですから、交流というのはすごくあるわけですね。交流の痕跡が出てくるのは、縄文時代の早期の末から前期の初め（紀元前5,000年紀から4,000年紀）ぐらいにかけての段階と、縄文時代の中期から後期（紀元前3,000年紀から2,000年紀）にかけての段階で、中後期では、

韓半島と九州の間では、土器だけでなくさまざまな文物が両地域に共通して出てきたりするということですね。それを考えますと、縄文文化が独自の文化だとしても、さまざまな外的刺激によって地域地域でだいぶ様相が違ってきてる。

だから、吉崎先生がサハリンとか沿海州なん



甲元眞之



黒曜石とその石器

* 磨消縄文：土器の表面に縄目をつけて、沈線で区画し、区画の内か外側を擦り消して文様とするもの。

* キバノロ：中国東部低湿地帯や朝鮮の低木地帯に生息する小型のシカ科動物。雄の上顎の犬歯が刀状に突出するのが特徴。この犬歯はしばしば装身具に使用された。



佐藤洋一郎

かを通じて、常に外側からの刺激のもとに、違ったものが出てくると言われました。同じように、九州においても、韓半島とのつながりが

北の栽培植物

佐藤 で、吉崎先生、日本列島の北の方では栽培植物の動きはどうか。

吉崎 それがね、実は最近悩んでるんだけど、わからなくなってきた。一つ言えることは、これは甲元先生に、今回、確認しなきゃならないけども、サハリンや沿海州にはヒエがないらしい。

佐藤 ヒエがないんですか。

吉崎 ない。韓半島はオオムギ、それからアワ、キビですね。それから、クロフォード博士がね、韓半島、山東半島、さらに審陽のそばで雑穀が入っていたピットなどを調べてるんです。それにもどうもヒエはない。それから面白いのがね、ダイズの確定したものが新石器時代にはない。

すごい強い。

吉崎 だから九州とか西日本では、南の縄文文化は、東日本の縄文文化と同じ文化の概念ではまとめられないと思います。

甲元 そう。

吉崎 土器形式のことをうるさくいう連中でもね、たとえば、北海道西南部から東北の土器を知っていればね、だいたい近畿ぐらいまでの土器ならば見当はつくけども、九州のになったら異国扱い。

佐藤 (笑)、異国ね、はい。

吉崎 ところが、文化圏というのは、国境と少し性格が違うのじゃないか。無理矢理くっつけている部分があるのじゃないかと思うけど。

佐藤 「日本」という観念が強すぎるんですよ。

甲元 そうだと思うんですね。

佐藤 はあ。それは意外だな。

吉崎 ダイズなんか古くからあってもいいと思うんだけど、出てこない。

佐藤 へえ。

吉崎 それから、今その青森県の三内丸山調査団と共同でやっているという、例の…。

佐藤 興隆溝ですね。

吉崎 興隆溝の近くの興隆窪の資料でも、アワ2粒が検出されているだけでね、それ以前の時期はどうもはっきりしないんですよ。紅山文化の時期には栽培植物がたくさんあるのね。

甲元 あの段階にはあります。

佐藤 それはいつごろですか。

甲元 B C 4,000年からB C 3,000年くらい。

佐藤 5,000—6,000年前ですね。

韓半島における栽培植物の出現

甲元 韓国の例では、ヒエは忠清北道の宮坪里^{フンビョンニ}という遺跡で出てますけど、それ以外はわからない。それ以外多く出るのは、やっぱりイネ、アワ、キビ、モロコシ、ダイズ、アズキ、オオムギ。

佐藤 すいません、それ、やっぱりその時代ですか。

甲元 ええ。韓国の場合は、新石器時代の中期と言いますか、これだいたいB C 4,000年から3,000年。

佐藤 B C 4,000年。

甲元 紀元前4,000年紀には、確実にアワがありますね。それが、平壤付近と、それから、釜山の東三洞貝塚^{トムサンドン}の最下層で出てまして、それがラジオカーボンでB C 3,300年。それから、新石器時代後期もアワがありますけど、イネが出てくるのが青銅器時代の前期で、B C 1,000年前後からですね。

佐藤 なるほど、なるほど。

甲元 そして、あとはイネが多くなるんですけど、B C 5, 6世紀以前の段階では、出てくるイネはほとんど畑作物と一緒に出土するんです。

佐藤 なるほど、畑作物と一緒にね。

甲元 はい。ところがB C 5, 6世紀以降になると、イネが単独で出たり、確実に水田遺跡が発掘されている。

佐藤 はあ。

甲元 ところが、B C 5, 6世紀というのは、要するに松菊里^{ソングクニ}という文化ですね。日本の弥生の水田に最も影響を与えたらうといわれるようなコンプレックスを持っている段階のものになる

と、イネがすごく優越してくる。それ以前の段階というのは、イネがあっても畑作物と共なんです。クロフォード博士がやったというなら、それは恐らく大坪里^{デビョンニ}だと思いますね、韓国の。あそこでは、畝^{うね}がいっぱい出てるんですよ、長い畝^{うね}が。それでね、イネも出てるけど、あそこではアワやキビやコムギ、オオムギが出てるんです。しかも、畑作雑草を伴って。

佐藤 完全に畑ですね。

甲元 そう。ですから韓国では、青銅器時代、新石器時代から青銅器時代の前期までは、イネは畑作であったと思う。それが中期になって水田が出ると共に、イネが単独で出てくるようになる。だけど、確かに吉崎先生が言ったように、ヒエというのは、ちょっとまだ問題があつてですね。やはり考えられるのは、アワとかキビとかモロコシとか、あとイネですね。それからコムギが問題ですね。

佐藤 ただコムギは種^{しゅ}の問題が非常にややこしくって。

甲元 ええ、どなたが同定されたかということによっても、またちょっと違いますのでね。一般的には、アワ、キビ、モロコシ、イネと、あとダイズ、アズキ。ほぼ、韓国では、日本の縄文後期の並行期ぐらいにはもう、既にそういうものがそろっているというのが現状ですね。

佐藤 日本列島の、少なくとも西半分なんかとそんなに違わないということですよ。

甲元 だろうと思うんです。

吉崎 ただね、クロフォード博士の未発表データを見ると、たとえば、コムギが現物で1,250土

- 青銅器時代：朝鮮の無文土器時代とも言う。およそ紀元前1,000年頃から紀元前300年頃まで。本格的な穀物栽培が営まれ、各種青銅製品が使用・製作された。
- アワ：学名は*Setaria italica*。英名は、その穂の形態からFoxtail millet。たしかにキツネのしっぽのような形の穂に特徴がある。日本のアワは多くがモチで、米のもちのように搗いて食べる。
- モロコシ：学名は*Sorghum bicolor*。日本ではほとんど使われないが、世界各地に栽培が見られる。中国では白酒(パイチュウ)の原料にしばしば使われる。貴州省のマオタイ酒は故毛沢東も愛飲した。

* クロフォード博士：ゲイリー・クロフォード。本誌47ページ参照。